

道徳に於ける歴史的制約とその限界

余語翠巖

所與の自己を越える力それが義務意識と云はれ得よう。所與の自己とは本能的自己であり、之を越えるとは理念的方向へ進むことである。廣義に於ては兩者共に自己と考へることも出來やうが、この兩者の間には價値の階次が考へられねばならぬ。具體的な意識に於ける染淨の別に對する根據を失ふ時は自然見に墮する外はない。能統一としての自己とそれによつて排列せられる所與の自己とと共に所與として素直に見る時に兩者共にその處を得べく、自然見の外道とはこの素直さを有たず、慙ひに一面の自己に立籠つて壇中の天を守り耳を塞ぎて鉛を偷む徒輩である。素直に耳を開けて自己を聞く時人は「Thou madest us for Thyself」としての自己の聲を聞く。本能的方向のみが自然であり、之を統一する方向が作爲であるとすることこそ頗など云はれねばならぬ。虛無主義自然主義の流類が文化の領域に於てその主體的力を取得出來ぬのはこれに依る。ともかく所與を越える力、時の流の中にあつて自ら流れてゐることを意識する力、自ら行爲しつゝ而も之を知る力、かくの如き超出力によつて人間は天地生成の力萬物を育成するに類して能生自然「natura naturans」と云はれる。現在の自己、過去の自己、未來の自己が何れも社會的限定と考へられるものもこの超出力によるものと云へやう。道徳宗教もこゝに依因する、道徳に於ける義務意識はかくしてその先驗性を認められねばならないので

あらう。けれ共その普遍妥當性を求めてかくの如き先驗性に到つたとしても、その形式性は決して具體的行爲に於て吾人を助けるものではない。具體的歴史人として特殊の過去を有つ個人の特殊的行爲そのまゝに絶對性を有つことは如何にして可能であらうか。私は歴史的事實の意義を見出すことに依つて一應の答として見たい。

歴史は歴史的素材をふり返ることによつて成立する。流れて來た歴史的變遷はこの流をふり返ることによつて成立する。流れた時間 流れた自己をふり返る力はかくふり返りつゝ流れてゐることをも意識するものであつて、之は主知主義的偏見の上に立つた自己として斥けられるかも知れぬが、之なくしては流れる自己の意識さへないと云はねばならぬ。流れる自己と云ふ意識成立の可能は過去を流れたものとする力である。この反省の力を基點として歴史が成立すると云へよう。歴史的素材はかくの如く自己超出力を有つものゝ内容である。而して歴史はかく超出の力を有つたもののみが有つものであり、その内容は人間的世界造立たる意味でなければならぬ。單なる草木瓦礫の時間的變化が歴史とは云へない。動物の歴史、地殻の歴史等云はれるとしても次元を異にするものであり、廣義に於て兩者を呼ぶと雖も問題は常に意味の起伏であり文化の内容に向けられねばならぬ。

自己と云ふものは種々に考へられる。知的自己、情的自己、意志的自己、更には一の知的自己とも云ふべきそれ等の統一面としての自己等が考へられる。けれ共是等は直接的の自己それ等を成立せしめる具體的自己の抽象化と云へる。具體的行爲の世界はかくの如き具體的自己の行爲の世界である。かくの如き行爲に於て自己の對象となるものは單なる物、單なる知的對象ではない。遂に知的對象はその對象の擔ふものを取り去つたところに成立する如きものである。意味を

擔つた物である。喫茶と云ふ行爲に於て茶はかくの如き意味を有たねばならぬ。知的對象に於ては茶の有つ具體的な意味は嚴密な意味に於て考へられない。茶は行爲の對象たる時、渴を醫するものであり、時には寂を感じしむるものである。行爲的自己に對する對象は意味を有つたものである。かくの如きものが歴史の内容でなければならぬ。あらゆる事は時に於て生じ時に於て滅す。けれ共時に於て生滅するもの悉くが歴史ではない。歴史は單なる物の時間的系列ではなく意味を有する物の時間的系列である。意味を有てる物は只行爲する具體的自己に於てのみ見出されるもので、この時は既に物はないとも云へよう。意味のみが實在すると云へよう、意味を見出すことそれが人間界造立と云へる。物質文化は物の中にある理を意味化したものと云へる。歴史は人間界造立に始まる。けれ共野畜と雖も本能的とは云へ各々に適したる意味を自然物の上に見出してゐる故に物の中にある理を意味化する間は眞の人間界造立とは云へない。鐵は夫れ自身鑄工に從ふの理を中に備ふ。故に之を鑄て鐵瓶とする。水は自ら方圓に從ふもの、故に之を鐵瓶に納れて以て湯とする。水火相納れざれ共各々の理を用ひて以て行爲的人間の對象たり得る意味を見出すことが出来る。けれ共之は鳥が糞の柔き理と木の之を支ふる理により巢を作るのと物に備はるの理を用ひるは同じこと故、眞の人間界造立とは云へぬ。その間に階次的相違はない。精神文化と云はれるものに於ては意味は物に具有されたものではない。無内容なる意味はないが、精神文化に於ては意味なくして精神文化の内容をなすものは考へられぬ。義は君臣の間柄を成立せしめる根據である。君臣有義と云はれるこの共同態に於て義なき時君臣の間柄と云ふことは考へられず、その連りは斷たれて單なる無關係のものとなる外はない。この時義はかくの如き意味と云ふことが出来る。之が精神文化の領域に於ける意味であり

こゝに初めて人間的意味の特異性を見ることが出来る。かくの如き階次の相違を包みながら歴史は意味を内容とする。

一般に歴史と云ふものが偶然的な事件の時間的系列であり、それについての知識は知識の過剰であり贅澤である如く考へられる。只現在に立つ吾人としては現在及び將來に於て自己の生に役立つ限りに於て之を知るべきであり、歴史は豫知せんが爲に知らるゝ意味に於て價值を有つに過ぎぬとされる。歴史が生に仕へるべきで、生が歴史に奉仕すべきでないと云はれるかも知れない。歴史學成立のイデアとして歴史的價值を一回限りのものに見出す考へ方がある。この考方に幾分の筆を費して思索を進めよう。一回的のものを求めて行く處に現在傳へられてゐる如き歴史的事實が無數の時間的生滅の事實の中から浮び出ると考へる。かくの如きことは人間の價值意識が唯一獨自である處に成立することに依因する云はれる。科學的價值は法則的價值であり、歴史的價值は個物特殊の價值であると云はねばならぬ。自分の敬する者愛する者が時を経て又處を隔てゝ今一度今一人存することは如何に恐ろしき事であらう。かくの如きことは考へられない。もし考へ得るとすれば現實の價值意識は消滅するの外はない。この事は自己自身の意識について最も明白である。

人幾度か過しけんその生命を己れ又自ら獨自の生命として生きて行く。自己の唯一性不可比較性に生命的價值は見出されると考へねばならぬ。勿論自己と雖も一般存立の様式を離れたものではない。自己の存立の背後は三段論法的に考へられる、それは特殊の空間、特殊の時間を占めて立つ個物の存在であるが故に。即ち生起の一般法則を大前提とし、その特殊的生起を小前提として現前の事實一つゝが結論として見出される。けれ共特殊的生起の命題は大前提たる一般的法則より導出されるものではない。小前提の主語たるものは特殊を特殊ならしめる制約に先行せられる。この制約は

微分的に無限に無時間的超空間的な生起の一般法則に近づくと雖も依然として無限に微分的に開きを思はざるを得ぬ。もし一般法則の限定の如く考へるとすれば神の恣意の如きものを考へざるを得ぬ。一般法則と特殊存在とはどこまでも一致することは出來ぬ。かくして現實的個物の底には一般法則を以て割り切れぬものがある。無原因性とも名くべきであらうか。こゝに凡ゆるもの一々が唯一獨自の價値を有つと考へられ、自己が根源的自由を有つと考へられる。唯一獨自のわれ、われの一切であるわれ等の如き思想もかくの如き價値意識に根ざすものと云へる。兎も角歴史的事實はかくの如く時間的特殊生起の中に獨自の價値を有つと考へられる。繰り返し得ぬ獨自の具體的事實の中に歴史的價値がある成程歴史を構成する事實はたしかにかくの如き性格を有つてゐる。唯一獨自の具體相を有つてゐる。史學が自ら科學と主張し、特殊な因果關係を具體的事實の間に見出して事件の連絡を確立することに特異性を見出すは之によると云へよう。けれ共一回限りのものゝ價値は果して何であらうか。吾人は一步も過去へは立ち還り得ない。只現在を盡しつゝ未來へ進むと考へられる。立ち還り得ぬ過去の知識が如何なる價値を有つか。而も一回限りのものとして生起した事の知識が現在を壓迫する如きことは愚かしきことではないか。一回限りのものが歴史的價値ありとして之を知らんとするは知識の贅澤であると傳統へ反抗する人々によつて斥けられる所以である。思へば、一回限りのものは思ひ出としての價値を有つものである。一回限りの事柄は自己の生活過程の中につれて、悲しきにつけ樂しきにつけ思ひ出として残つてゐる。日々繰り返し得る茶飯事はかくの如く思ひ出とはならない。再び繰り返し得ぬ所に思ひ出としての價値を有つてゐる。歴史は人類の思ひ出としての價値のみを有つのであらうか。史學の見出す歴史的價値のみが吾人生活する

ものゝそれであつてはならない。かくの如き價値のみならば正に歴史は知識の贅澤である。個人の思ひ出と云ふものは單なる過去の追憶として非實在的と云はねばならない。けれ共歴史は吾人の脚跟下に脈々と連るものである。歴史が思ひ出としての價値のみを有つならば知識の贅澤として斥けられてもよからうが、それは傳統としてその不可避の下に立つ個人に生きてゐるものである。單なる追憶ではない。歴史は意味をその内容とすることを論じたが、吾人は具體的な諸々の行爲に於て、かく行爲する自己の對象として諸々の意味を見出す時にその意味の背後に吾人の父祖の遺産をはつきりと見る。之は諸々の日常事の中に於て明かである。かくの如く物の理を意味化した處にそれが文化的事業として一回限りなる價値を有つと云はれるかも知れない。けれ共この場合それが一回限りなるが故に價値有りとは云へぬ。更に又歴史的價値はその原初に於ける一回性に在るので、よしその事が人類の文明に寄與するものとして萬人が日常事の中に愛用するに到つたとしてもその日常受用の中に歴史的價値は見出されぬと云はれるかも知れない。けれ共歴史は却つてこの中に價値を見出されるのであるまい。このことに就いては今少し考へねばならない。一回限りのものに價値を求めて行くことを徹底するならば現在傳へられてゐる歴史的事實はあまりにも杜撰なものとしてその價値は考へられない。即ち草木瓦礫の一つゝが前述の如く三段論法的に考へられるとすると各々の空間的時間的特殊存在の制約は依然として無原因性として一般法則によつて割り切れぬ剩餘であり、各々獨自の一回性を有つ。草木瓦礫一つゝ獨自であり一回限りと云はねばならない。形式的に一回限としても内容は一回限りとは云へないと云ふことは出來ぬ。一回限りの意識は嚴密には空間的時間的限定を除いては考へられない。かくの如くの一回限りの意識が考へられるが故に吾人の

生活に於ても、同じく「よろづのこと今をかぎりと心得べし」と云ふ如き考にその内容に於て天地の相違を來すのである。

日々が乃至は一瞬一瞬が無原因性の意識に支配されて、たとへ無爲に過しても更には惡行に満されてゐても何等かの意味に於て價値ありとする生活傾向が考へられる。朝々日は東に昇り夜々月は西に沈む。そこに一日の完成があり、何等次の日の準備の意味はない。一日一日乃至一瞬一瞬が獨自の價値を有つてそれ自身完成してゐると考へる。自己の無爲より更には惡よりの避難所としてかくの如き皮相なる完成の意識へと入り来る。之も一回限りと云ふ意識の一面と考へられる。さて草木瓦礫の一回性、凡ゆる個人の不可比較性等が考へられると現在傳へられてゐる史實はその傳値を失はねばならない。一個の木石と一人の兵士と一人の將帥とその相互の獨自性一回性に於て何等差異あるものと云へない。一回限りと云ふことを以てのみ歴史的價値とするならば歴史編纂の不可能を示すものである。けれ共歴史は存する。然らば歴史はその成立の底に何を有つものであらうか。傳へられてゐる歴史的事實は一つくが「かくありき」として不可變容のものであり獨自の相を示すことに歴史的と云はれる所以も考へられる。けれ共絶對に一回限りのものは一體何であるか。かくの如きものゝ知識は正に贅澤である。歴史的事實と云ふものはその底に吾人の中に生きるもの否吾人生かすものを有たねばならぬ。社會的傳承の文化財の如き方向にこそ勝義の意味を見るべきである。然しそれは不變のものとして人間の心理的物理的の性向の如きものではない。社會的傳承は吾人の環境として立つものであり歴史的事實も環境の意味を有たねばならぬ。環境は吾人の生きる場所である。生命は之によつて培はれてゐるものである。環境は衣食住の過程に於て風土と考へることが出来る。自己は衣食住をなす具體的自己としてその對象は意味を有つた自然物

としての風土環境に接するのである。人が特定の過去を有つのはこの風土環境の特殊性によると云へる。自己の生活を打建てるのは自己に於て環境を統一することである。けれ共環境は自己一個のものではない。同類の共受すべき共相であり、特殊に對する一般の關係を有つてゐる。風土と云ふものはその中に居するものに共通である。かく共通に風土を享受するものは之に即して生活を打ち建てる。意味を擔ふ主體は特殊と云ふの外はない。正に特殊的生起として無原因性とも云はれよう。そして茲に超克し得ざる事實として特殊の生活形式が成立する。風土を異にするに隨つて生活様式は異なる。寒は寒に應じ、暑は暑に應ず。海に應じ山に應ず。海に生活を建てるものは舟を浮べ漁をなす。山に意味を把握するものは狩をなし野に農牧を起す。かくの如き意味造立のところに一回起的歴史を見得るとも云へる。更に道德宗教の世界と雖もこの特殊的造立の意義を有つものである。風土を異にするに從つて德の内容を異にし宗教も形を變じ来る。時處によつて異なる生活様式文化形態を眺めることが出来る。けれ共その時の自己は眺めてゐる動かぬ自己であつて環境を享受すべき自己ではない。具體的自己は常に云はれる如く歴史人社會人として立つものである。歴史人として環境として歴史に向ふ時特殊的生活造立の中に自己の生きる道を見出す。諸々の歴史的事實はかゝる特殊的のものゝ範例でなければならぬ。勿論底には人間共通の傾向は存しなくてはならぬがそれの特殊的成立に歴史的事實の意味がある。この意味で一回限りと云ふことも出來よう。しかし一回限りと云ふことは單なる思ひ出のことではない。思ひ出は自ら環境の意味を有たぬ。歴史的事實は具體人として歴史に對する自己にとつて環境の意味を有たねばならぬ。一回限りであることが歴史的事實の特性であるが、それが環境と云ふ所に統一される時その一回性は普遍性を合致する。同一風土

に於ける歴史の起伏はこの意味を有たねばならぬ。歴史的事實は第一に一般的因果法則に基くものではあるが、その特殊の一回限りの生起に歴史的價値を見出される。第二にそれが最も生々たる獨自意識に於て立つ自己に對して環境的意義を有つ時に知識の贅澤としての非難を逃れ得るであらう。之は歴史的事實がその一回起性を保持しながら傳承の中に流れ入る事である。歴史性として歴史的事實を傳へる根本契機はこの兩性格でなければならぬ。

人はその道德生活の統一の根本をこの歴史の方向に見出さねばならぬ。義務意識は慣習 die Sitte に内容を得て道德 die Sittlichkeit となると云はれる。歴史的事實の中には未來を規定する意味をも藏すると考へねばならぬ。教育は所詮自然人より歴史人を作り出すと云ふの外はなく歴史の環境的意味は明白である。歴史と云はれるものは歴史的事實を何等かのイデーを以て把握するところに成り立つと考へられる。けれ共歴史は歴史學の對象のみでなく最も勝義に於て自己を生かすものと考へられる。歴史が意味をその内容とするとは歴史が常にかゝる意味に對應する自己に關りを有つことを意味する。この自己に對する意味の世界表現の世界に關りを有つが故に一個の石も一片の紙も歴史的世界に屬し得る。歴史は常にこの主體に對應する意味の世界やがては文化の起伏でなければならぬ。動物と雖もその環境に自然界の如きものを考へ得られる。けれ共歴史的環境を有つものではない。時を超克し得る人間の環境に於て環境の歴史的方向を考へることが出来る。自然界としての環境が夫々特殊の氣候風土の如きものである如く環境としての歴史もその具體的内容は特殊のものである。特殊の言語特殊の信仰特殊の道德に於て意味把握、人間造立を實にしてゐるものである。現實の自己はかくの如きものによつて形成されてゐる。かくして環境として歴史に對する時そこに見出されるものは具

體的な社會相であり、自然成立の國家の相として民族思想の綱格であり、言話であり慣習等であると云へる。溫故知新と云ふことは不幸にも全體目標が指示されてゐない人類にとつて唯一の方向とも云へるが、之は歴史の環境的意味を示すものであり、却つて全體目標的意義をこの中に見出し得るとも云へる。道徳のイデアが環境的客位に立つのみでなく主體的優位に立ち得る所以である。溫故と云ふことは自己の具體相を明すことである。自己は如何なる具體的環境にあるかを知ることである。變化する人間の生活態の中に五つの共同態を五常として把捉した社會にあつては五常として親義・序・別・信・等が實現すべき目標の如くも考へられる。個人主義思想の支配する社會と家族主義思想の支配する社會に於て善惡の具體的内容は異なる、而も一般的善なるものはない。一般的善最高善の如きは所謂全體目標の定まれる時に於て始めて可能である。功利的意識を越えた更には之を否定する如き嚴肅さを以て迫る義務意識も歴史的特殊的方向を以て實にされる。特殊的のものゝ中に生きる道を見出す。溫故即知新でなければならぬ。具體的自己が歴史に對する時は歴史學成立のイデアとして一回限りのものと云ふ如き領域を越えて、かゝる勝義に於ける生の力を有つたものとして考へねばならぬ、傳統否定の迷妄に墮してはならない。傳統を墨守することが生の力を殺すものであり傳統に抗して立つ事が賞揚せられる如き事實は如何に考ふべきか。凡ての社會は夫々の風土によつて特殊の意味把捉に立つてゐる。傳統精神と云はれるものであり、夫々特殊のものであり、他の社會と共通の傳統精神の如きものはない。特殊的とは云へその社會の根本を爲すものである。事君第一をかくの如き傳統精神としてゐる社會に於てはこれを根本として自己の行爲を統一することが要求される。かくの如き傳統精神に立つ限りそれは偶然のものではなく、傳統の墨守こそ眞の生きる道

である。けれ共この精神をして力を失はしめ不明ならしめる如き方向ならばこの時こそ改革は是認される。常に社會の根本性格に於て如何にその内容は豊になつても「元へ歸れ」でなければならぬ。この精神を斥ける如き改革は毫も許さるべきではない。かく云へば歴史は進まぬと考へる者と云はれるかも知れない。けれ共歴史が進むとは如何にして考へられるか。進歩とは部分の先に全體がなければならぬ。アリストテレスの如く純粹形相へ向つての發展でなければならぬ。進化論の如く只順應性に従つて變化して來た無目的の過程は眞の發展とは云へぬ。眞の發展にはその實現すべき全體がなければならぬ。この全體目標なき處に眞の發展はない。全體目標なき過程は單なる變化と呼ばれる外はない。不幸にも人類の妥當的全體目標は定まつて居らない「何が故に」の窮極點に於て何等定言的權威を有つものはない。相對的領域に於て定まつてゐるに過ぎない。かくして窮極に於て全體目標のなきところ眞の進歩發展は考へられない。かくの如く一應は考へられるとしても全體目標的意義を有つものへの要求は依然として存する。無意味なる生存は自己を知つて働くものにとつて堪へられぬものである。窮極目標によつて自己の行動を統一せんとすれば普遍妥當的目標の不明を卿つ外はない。この時社會の傳統精神こそ過去に教へられて全體目標的意義を有つ。社會が單なる個人の福祉の爲に存すると云ふ如きことが不可避の結論となる如き功利説の社會觀を越えて、かゝる全體目標的意義を獲得するのは父祖の足跡による。傳統精神に於て生死を規定したる人々の壯烈こそ無限の教訓を含むものである。かくの如きものが傳統精神を形成するものである。大義親を滅すと云ふ如き精神に生きた人々にとつて君臣の間柄は他の何を捨てゝも主張せねばならぬ義理であり、現實的に無限の悲哀を感じつゝも大義は全體目標的力を有つて迫つて來るものである。君臣の間

柄があらゆる他のものより優位に考へられる社會、父子の間柄がかく考へられる社會、夫婦の間柄がかく考へられる社會等々その圈外に立つて之を見る時共通な全體目標の具體的規定は見出しえないが傳統精神として社會の慣習として全體目標の如き定言的權威を示してゐるのを見るであらう。かくの如きものが傳統の精神であり、その社會の根本性格として考へられる。改革は凡てこゝへ歸るものでなければならぬ。自由なる人間にとつて改革は可能である。けれ共變化は發展ではない。溫古とはかくの如き精神を環境的意義に於て見出すことであり、知新とは自己が環境の統一に於て立つ自由なる意識に於ける具體的行爲の謂である。溫古即知新と云ふことは環境的意義に於て見出された傳統精神がこの自由の自己の中に統一されることを示すに外ならない。

かくの如くにして一般的過去一般的環境一般的善惡の如きものはなく只あるものは特殊のみである、歴史が一回限りと云ふイデアを以てのみ見られる時にそれは知識の贅澤として難ぜらるべき、その一回起性を保有しながら特殊の意味を捕捉、その社會その風土に應じたる特殊相の中に於ける起伏として環境的意義を有つ時正しく生の意味を有つ。具體的自己は一般的人ではなく特殊の過去を有ち特殊の環境に生ひ立つた歴史人である。自己の行爲は善惡は歴史的傳承の精神による。特殊の標準によつて律せられる、事君第一の社會に於ては親を滅してもこの大法に従ふべく、之に外れて親子の情に戀々たるは罪となる、親子第一の社會に於ては君臣の間柄は第二である。孟子の問者に答へて、舜父瞽瞍罪を得て刑せらるゝに當り帝位にある舜は帝位を捨てゝ父と共に逃れ、その父餘命を終ふるまで之に事ふべしと云へる如きもこの一面である。その傳承は社會の根本性格を有ち全體目標の如き權威を有つものであり、偶然的のものではない。

之を偶然と云ふ如き考は一般人としての立場に立つて云ふものであり、かゝる自己は動かぬ自己である。實なる自己はかかる歴史的傳承の社會の精神に規定されるものである。

以上の如く人は歴史によつて生まれたものと云ふ方向の考察に於て道徳の具體的内容の根柢を求めて來た。けれ共果して倫理學は歴史哲學に完結するものであらうか。個人の生存乃至は人類の生存のそれを越えて行く方向への省察、「何が故に」と云ふ方向への目的論的考察の連鎖は神の計畫に與らぬ吾人にとって不可知の問題として不間に付することは出來ない。人間は行爲を知るものである。行爲の始終を知るものである。目的を知るものである。一切現實の動きが「何の爲に」と問はれるこの形而上學的方向は人間の特異性である。たゞ、生きること自身が目的であり、目的的連鎖の彼方は無であると云ふ考にしても、かくの如きこと自身既にこの問の解答と見なければならない。價值意識に基く實踐的要求の背後はかくの如き形而上學的方向に貫かれてゐるものと考へられる。宗教・哲學の根柢である。苦と云ふものが考へられる場合にも、かの四苦八苦は五陰盛苦に攝せられると思はれる。諸々の欲求が生れては消え消えては生れる果しなき連鎖を知ることの上の苦惱たらねばならない。生きることが奉仕すべき全體目標への方向は不可避のもとのと云はねばならぬ。かくの如き方向が否定されて凡て現實の動きは「生きること」に奉仕すると云ふ考は人間を物的視し進化論的方向の彼方に毫末の飛躍もなく考へてゐる人々の見解である。凡ての事は單なる生存の手段的存在であつてかくの如き立場にあつては正しさと云ふものゝ根據は少しもない。正しさの根據は道徳のイデヤの如きものゝ有つ主體的に求められねばならぬ。それが手段視せらるゝ限りその主體的力は否定されて正しさの根據は失はれる。法に對

して有法と云はれる人間にとつて形而上學的方向は根柢的のものであり、形而上學の嚴密な批判に於て立つ認識論も形而上學的方向に裏付けられてゐると云へよう。兎も角生の奉仕すべき目標は何等かの意味に於て示されねばならない。前述の如く道徳の有つ主體的イデアに於て全體目標的意義を見出して來た。けれど一度反省する時歴史的内容は義務意識の絶對的内容となり得るとは云へない。社會の個人に對する規定力として全體意識の意識的強化を文化體系と名け之が社會の任務と考へるとしてもそれは既に單なる生存を豫想してゐる。それは一つの循環である。義は君臣の間に於ける規定力である。けれど此の義が絶對的主體的力を有つるのは君臣の間柄の絶對性が考へられて初めて可能である。經驗内に於て吾人は之を越えることは出來ぬ。

越えざる限りその絶對性を裏付けることは不可能であり、義と君臣との間柄は相對的な循環に墮するの外はない。宗教はかくの如き形而上學的性格に答へる究極のものと云はねばならない。宗教的倫理觀は論議の外として斥ける所その倫理觀は第二次的のものとなつて所詮生の手段以上には出ない。生を導くものとはならぬ。凡て文化的イデアは宗教的イデアに統攝されることは人間の形而上學的性格に由來すると云へよう。宗教は文化を生かすものでなければならぬ。狂信は一の變態であつて許されぬ所以である。道徳も宗教的イデアに包まれて全き生の導き手となり得る。大乘戒は法界造身盧舍那佛の「誦」せられたるものであつてその説示ではない。梵網經中に悉くこの「誦」を用ふる所以を思ふべきである「人佛に向へば佛人に向はず。人々に向へば佛人に向ふ」と云ふ言葉にその眞意を掬すべきである。道徳が宗教に生かされる時、歴史的制約の限界を知る時に渾然一體となつて生を導く眞の主體的力を有する時である。義務意識の抽象性

は歴史的制約に於て具體性を得、更に以上の如き限界を越えて宗教に於て生かされる時に眞に主體的力を有つと考へられる。倫理學は歴史哲學に完結するものでなくて宗教哲學に於て完結するものでなければならぬ。